

半日ある記

寺田寅彦

青空文庫

九月二十四日、日曜日、空よく晴れて暑からず寒からず。数学の宿題も午前の中に片付けたれば午後半日は思うまま遊ぶべしと定まれば昼飯待遠し。今日は彼岸にや本堂に人数多集りて和尚の称名の声いつもよりは高らかなるなど寺の内も今日は何となく賑やかなり。線香と花估るゝ事しきりに小僧幾度か箒引きずつて墓場を出つ入りつ。木魚の音のポン／＼たるを後に聞き朴齒の木履カラつかせて出で立つ。近辺の寺々いずこも参詣人多く花屋の店頭黄なる赤き菊蝦夷菊堆し。とある杉垣の内を覗けば立ち並ぶ墓碑苔黒き中にまだ生々しき土饅頭一つ、その前にぬかずきて合掌せるは二十前後の女三人と稚き女の子一人、いずれも身なり賤しからぬに白粉気なき耳の根色白し。墓前花堆うして香煙空しく迷う塔婆の影、木の間も日光をあびて骨あらわなる白張燈籠目に立つなどさま／＼哀れなりける。上野へ入れば往来の人ようやくしげく、ステッキ引きずる書生の群あれば盛装せる御嬢様坊ちゃん方をはじめ、自転車はしらして得意気なる人、動物園の前に大口あいて立つ田舎漢、乗車をすゝむる人力、イラッシャイを叫ぶ茶店の女など並ぶるは管なり。パノラマ館には例によつて人を呼ぶ楽隊の音面白そうなれば吾もまた例によつて足を其方へ運ぶ。また右手の小高き岡に上つて見下ろせば木の間に、若

の絡繹らくえきたる、秋なれども人の顔の淋しそうなるはなし。杉の大木の下に床しょうぎ几を積み上げたるに落葉や、積りて鳥の糞の白き下には小笹生おさぎい茂りて土すべりがちなるなど雑ざつ鬧どうの中に幽趣なるはこの公園の特徴なるべし。西郷像の方へ行きたれども書生の群多くてうるさければ引きかえしパノラマ館裏手の坂を下る。こゝは稍やや静かなれど紅塵ようやく深く鉄道構内の煤煙風に迷うもうるさし。踏切を越えて通りかゝりし鉄道馬車にのる。乗客多くて坐る余地もなければ入口に凭もたれて倒れんとする事幾度。公園裏にて下り小路こうじを入れれば人の往来織るがごとく、壮士芝居あれば娘手ておどり踊あり、軽業カツポレ浪花ななわおどり踊、評判の江川の玉乗りにタツタ三銭を惜しみたまわぬ方々に満たされて囃子はやしの音ただ八ヶやまし。猿に餌をやるどれほど面白きか知らず。魚釣幾度か釣り損ねてようやく得たる一尾に笑靨えくぼ傾くる少年帰つてオツカサンに何をはなすか。写真店の看板を見る兵隊さん。鯉うじに麩ふを投ぐる娘の子。凌りょう雲閣うんかくじょう上人豆のごとしと思ふ我を上より見下ろして蛆うじのごとしと嘲りし者ありしや否や。右へ廻れば藤棚の下に「御子供衆への御土産一銭から御座ります」と声々に叫ぶ玩具おもちゃ売りの女の子。牡丹燈籠ぼたんどうろうとかの活人形いきにんぎょうはその脇わきにあり。酒中花しゅちゅうか欠かけ皿らに開いて赤けれども買う人もなくて爺おやが煙管きせるしきりに煙を吐く。蓄音機おとわや今音羽屋おとわやの弁天小僧にして向いの壮士腕をまくつて耶蘇教やそきょうを攻撃するあり。曲書きのおじさん大黒天

の耳を書く所。砂書きの御婆さん「へー有難う、もうソチラの方は御済お済みになりましたかな
 ー、もうありませんかなー。」へー有難うこれから当世白狐伝を御覧に入れる所なり。魔ま
 除鼠よけ除けの呪文、さては唐竹割からたけわりの術より小よりで箸を切る伝まで十銭のところ三銭まで
 に勉強して教える男の武者修行めきたるなど。ちと人が悪いようなれども一切ただ只にて拜見
 したる報いは覲てきめん面、腹にわかには痛み出して一步もあゆみ難くなれり。近きベンチへ腰を
 かけて観音様を祈り奉る 俄にわか信心しんじんを起すも靈験れいげんのある筈なしと顔をしかめながら 雷かみな
 門りもんを出いづれば仁王の顔いつもよりは苦にがし。仲見世なかみせの雑ざつ鬧とうは云わずもあるべし。東あずま
 橋しに出いづ。腹痛やゝ治まる。向うへ越して交番に百花園ひゃつかえんへの道を尋ね、向島堤上の砂
 利を蹴かつて行く。空いつの間にか曇りてポツリ／＼顔におつれどさしたる事もなければ行
 手を急いで上へ／＼と行く。道右へ廻りて両側に料理屋茶店など立ち並ぶ間を行く。右手
 に萩の園と掛札ある家を、これが百花園かと門内を覗のぞくに、どうやら変なれば、客待ちの
 車夫に問うに、百花園はまだずっと先なり。大倉の別荘の石垣に、白赤の萩溢るゝがごと
 きに、二輛の馬車門を出でて南へ馳せ去りたる、あれは喜八郎の一家か、車上の男女いた
 く澄まし顔なるが先ず癩みめくりに触りける。三いなり圍みめぐりの稻荷堤上より拝し、腹まだ治まらねば団子
 かじる気もなく、ようやく百花園への道札見付けて堤を右へ下り、小溝に沿うてまがりく

ねりの道を行く半町ばかり。道傍、溝の畔に萩みだれ、小さき社の垣根に鶏頭赤きなど、早くも園に入りたる心地す。

この辺紺屋多し。園に達すれば門前に集う車数知れず。小門清楚、「春夏秋冬花不断」の掛額もさびたり。門を入れれば萩先ず目に赤く、立て並べたる自転車おびたゞし。左脇の家人数多集い、念仏の声洋々たるは何の弔いか。その隣に楽焼の都鳥など売る店あり。これに続く茶店二、三。前に夕顔棚ありて下に酒酌む自転車乗りの一隊、見るから殺風景なり。その前は一面の秋草原。芒の蓬々たるあれば萩の道に溢れんとする、さては芙蓉の白き紅なる、紫苑、女郎花、藤袴、釣鐘花、虎の尾、鶏頭、鳳仙花、水引の花さま／＼に咲き乱れて、径その間に通じ、道傍に何々塚の立つなどあり。中に細長き池あり。荷葉半ば枯れなんとして見る影もなきが一入秋草の色に映りて面白し。春夏の花木もあれども目に入らず。しのぶ塚と云うを見ているうち我を呼びかける者あり。ふりかえれば森田の母子と田中君なり。連れ立って更に園をめぐる。草花に処々釣り下げたる短冊既に面白からぬにその裏を見れば鬼ころしの広告ずり嘔吐を催すばかりなり。秋草には束髪そくはつの美人を聯想するなど考えながらこゝを出でたり。腹痛ようやく止む。鐘が淵紡績ふちほうせきの煙突えんとつ草後そごひに聳え、右に白きは大学のボートハウスなるべし、端艇ポートを乗り出す

者二、三。前は桜樹の隧道、花時思いやらる。八重桜多き由なれど花なければ吾には見
 分け難し。植半の屋根に止れる鶯二羽相對してきながら瓦にて造れるようなるを瓦じや
 鳥じやと云ううち左なる一羽嘲るがごとく此方を向きたるに皆々どつと笑う。道傍に並ぶ
 柱燈人造麝香の広告なりと聞きてはますます嬉しからず。渡頭に下り立ちて船上
 る。千住よりの小蒸気けたましき笛ならして過ぐれば余波舷をあおる事少時。乗客間
 もなく満ちて船は中流に出でたり。雨催の空濁江に映りて、堤下の杭に漣漪寄するも、
 蘆荻の声静かなりし昔の様尋ぬるに由なく、渡番小屋にペンキ塗の広告看板かゝりては
 簑打ち払う風流も似合うべくもあらず。今戸の渡と云う名ばかりは流石に床し。山谷堀
 に上がれば雨はらくと降り来るも場所柄なれば面白き心地もせらる。さりとして傘持たぬ
 一同、たとえ張子ならずとも風邪など引いては面白からねば大急ぎにて雷門前まで駈け付
 く。先を争いて馬車に乗らんとあせる人狂氣のごとく、見る間に満員となりて馳せ出せば
 友にはぐれて取り残さるゝ人も多し。来る馬車もく皆満員となりて乗る折もなし。婦人
 連れの事なれば奮発しようよう上等に乗ればこれもやはりギシつみにて呼吸も出来ざる
 をようようにして上野へ着けば雨も小止みとなりける。こゝに一行と別れて山内に入る。
 人ようよう散じて後れ帰るもの疎なり。向うより勢いよく馳せ来る馬車の上に端坐せる

は瀟洒しやうしやたる白面の貴公子。たしか『太陽』の口絵にて見たるようなりと考うれば、さ
なり三条君きみとみ美の君よと振返れば早や見えざりける。また降り出さぬ間と急いで谷中やなかへ帰
れば木魚の音またポンくく。

(明治三十二年九月)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日第3刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半日ある記

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>